

身者である著者が、其の母校同教室の緻密周到なる學風をよく繼承され、遺憾なく之を發揚されてゐると云ふことであり、此の點我々ほかのアメリカ農村社會學の巨匠ソローキンを中心とする一派の社會現象に對する極めて洗練された科學的態度を想起すると共に更に本書にあつてはかくの如き態度がより徹底してゐると思はれる點の少なからざることを知るのである。

第二には著者の農村人口移動理論が廣く此の領域に於ける一般的主要學説を十分に批判し検討された後に樹立された點が窺はれることであり、附録の主要參考文獻と共に我々後學の輩に益する所少くないと考へられることである。

終りに實際の調査研究を遊離して觀念的思辨的に農村を考察することが科學的に如何に無意義であるかは茲に改めて云ふまでもないであらうが、然しながらそれが又如何に勞多く困難なものであるかも之を體驗して初めて痛切に感ずる所である。著者が前後五ヶ年の歲月と幾多眞摯なる補助者の協力を得られたとは云へ

一萬餘戸に亙る農家の個別調査と之が整理は著者の一貫した學問的良心の下に於いてなされた事を思ふ時、言外に深く感ずるところあるを禁じ得ない。

猶本書はさきにも述べし如く主として昭和初期以來の農民離村現象を取り扱つたものであるが（又この點に本書の特色と價值とを見出すのであるが、それ以前の明治、大正年代から昭和初期に到るものに就いては著者も云はるる如く渡邊信一教授「日本農村人口論」（昭和十六年五月二十八日第四版發行、南郷社）、が最もすぐれた文獻である）と云へよう。

末尾にあつて我々は本書が昭和十七年度日本農學會賞を授與されし業績であることを特記し、併せて著者の今後の研鑽を切に祈る次第である。（池田）

昭和十七年十一月、岩波書店發行  
A5判、五六九頁、定價五圓五拾錢  
本學圖書館番號、外洋一一四四七

以上

宮本 正尊 著

## 根本中と空

（佛教學の根本問題第一）

宮本正尊博士の多年にわたる佛敎研究の成果をまとめて五卷となし、「佛敎學の根本問題」と題して上梓されるといふ企ては、現在の佛敎研究界にとつて誠に一つの大いなる福音である。同博士の慎重なる性格は、從來諸種の離誌などにおける論文の發表以外、獨立の著作を産み出さなかつたが、多くの重要な論文がそのために我々の手に届きかねるといふうち、みがあつた。こゝに同博士の學業業績の全貌が、悉く一堂に會することとなり、それが相互に映照しあつてかもし出す一種の學的雰圍氣は、同博士の持味を充分に發揮することと期待される。且又これによつて佛敎思想が、我國の學術の世界並びに思想界において、正しい認識をもつて受容されるにいたらんことを切に念願する次第である。

さてその第一卷として、ここに「根本中と空」が先づ上梓せられた。「根本中」

は同博士が長年にわたつて主張したる佛教の根本命題であり、本書の序によれば、中道思想の現在の意義は次の如き點に存在する。

「一方的見地を固執することは、謂はば對立に終始するに過ぎない。かかる對立に陥らず、これを超える立場は何か。一つの立場を堅持し不動心に住しつつ、而も對立を打開する正しい高い立場は何か。古い傳統の下に舊套に墮せず、革新的であるが破壊的でないことが、如何にして可能であるか。而も我々の理想精神は永遠なる傳統に立ちつつ、常に清新なる發展を遂げんとする。中道の思想的意義は、かかる問題に對して學ぶべき特質のものである。」

まさにかかる課題は、日本の將來に對する即今後の課題である。そして最も基礎的な問題である。若しよくかかる問題に答へらる思想ありとすれば、最もよく受容れられ、尊敬されねばならない。宮本博士は佛教の「中道」こそ、これに答へらるものとする。そしてかかる抱負の下に、その研究を完遂せんとする。吾人は

同博士の高い意氣込をここに觀取すべきである。

さて「佛教學の根本問題」全五卷は、各冊六百頁を超える大出版であるが、ここに上梓された第一卷「根本中と空」は、次の如き諸論文を含む。

- 第一 根本中の研究
- 第二 根本佛教の指導原理
- 第三 最初說法と中道
- 第四 燉煌出土大乘中宗見解に就いて
- 第五 必過性空論と中道
- 第六 中の哲學的考察
- 第七 空觀

これらの七論文、第五を除く他の六篇は、すべてかつて諸雜誌などに既に發表されたものである。それ故にここには特に第五の論文について一言したい。

「必過性空論<sup>フライサンギカ</sup>」といふは、印度大乘佛教の後期において、中觀派が二分したる中の一方の派名である。他の一方は自在論<sup>スワラ</sup>證派と呼ばれ、これらの兩派にその論議の進め方の上において異なる方法を用ゐたのである。この論文は論證法としての必過論法の意義を考察し、特に月稱の「中

論註」の中に出づる用例を悉く出して、その一つ一つの場合を稽べてゐる。しかし元來「中論註」はかかる論理學的問題を中心とせる作品ではないから、その用法には術語的意義が明瞭でない場合が存しそれ故に中論註が必過論法究明の唯一の資料ではないが、この論文によつてこの大體の模樣を把へることができる。

宮本博士は大谷大學の前身たる眞宗大學の出身であつて、かゝる優れたる研究者を我々の先輩の中に有することは、我々の大いに誇りとするところであり、且又大いに指導を仰がんとする所以である。(昭和十八年三月、第一書房發行、定價七圓五拾錢)

(龍山章眞)